

豪農の桐生進出と呉服渡世

杉森玲子

Advancement of Gono into Kiryu and Gofuku Tosei or Kimono Trade

はじめに

- ① 桐生への進出
- ② 呉服商売を通じた諸関係
- ③ 江戸への進出
おわりに

【論文要旨】

桐生新町は、その地域一帯で生産される多くの絹織物の集散地として発展し、周辺農村部から機屋の奉公人などが流入して都市的様相を呈していた。絹織物の取引の中心となったのは、市で独占的に絹織物を集荷し江戸や京都などの呉服問屋への買次を行う絹買仲間である。本稿では、仲間構成員の一人であった野州安蘇郡戸奈良村の豪農石井家が桐生に進出する過程やその呉服商売の様相を検討し、在郷町桐生の位置付けや豪農の活動のあり方について検討しようとするものである。

石井本家の五右衛門は、天明～寛政期に地主として急成長を遂げるとともに呉服渡世を始め、桐生にも出入りするようになった。文政期には旧来の絹買仲間構成員から得意先を譲り受け、桐生に出店をおいたが、他の絹買次商と同様に売掛代金の滞りが多く、戸奈良村の本店からの借入金に依存した赤字経営であった。天保期には、五右

衛門は江戸においても町屋敷や湯屋株などを所持し、呉服商売にも携わっており、経営不振ではあったものの桐生への進出が江戸への進出を含めその後の家業拡大の前提となったと考えられる。

一方、桐生新町は石井家のような豪農の進出を受けて、周辺地域の中核的な町場としての性格をいっそう強め、流通面でも江戸との結びつきの深い在郷町として発展していくこととなった。ただし、桐生新町では領主から賦課された才覚金をめぐって五右衛門の対応が問題になり、絹買仲間内部でも桐生に居住または出店をもっているかどうかで町とのかかわり方や織物類の集荷などの点で違いがみられた。石井家のような豪農層は都市と農村を結ぶ存在としてその活動が注目されるのである。